



一九三〇年（昭和五年）、超特急「つばめ」が登場し、東京―神戸間を九時間で走行したこの年、鈴木京太郎は、父耕作、母澄子の間に、比企郡都幾川村で産声を上げました。

この年は、紙芝居の「黄金バット」が子供たちの人気を集め、東京三越本店に「お子様ランチ」が登場した年でもありました。

京太郎が物心ついた頃、太平洋戦争が勃発します。誰もが生きていくことに苦難を強いられた時代。終戦後、焼け野原の爪痕を乗り越えながら、京太郎は、日本医科大学で学び、青春を駆け抜けました。

やがて日本は、急速に復興と民主化が進みます。高度成長期を迎える中で、京太郎は、力強い足取りで人生を歩みます。京太郎は、医師として、確かな足跡を記して、一歩ずつ歩んでいきました。

「昭和四十一年、熊谷の地に春日病院を開設したのは、勝男が三十九歳の時でした。

『この地での設立こそ私の人生だ』と心に決めた時から、医療と地域の発展に寄与するその精神は、病院や医療スタッフに宿り、地域が必要とする病院を目指しました」

生まれし道のりを訪ねてみれば、京太郎は、縁の糸に導かれ、芳子と共に歩み始めます。移りゆく年月とともに、悦子という子宝を授かり、子を持つ親の喜びに満たされる日々を過ごしました。



どんな激務も、子供たちの寝顔が一日の疲れを癒し、明日への糧となりました。温みのある日々の暮らしの中、京太郎は、幸せな時間に包まれました。

「ゴルフとお酒が大好きでした。休日にはよくゴルフに出かけました。そして日本酒には目がなかつたようです。好んで仲間と共に大騒ぎをし、にぎやかに過ごしました。また、カラオケ教室に通うほどカラオケ好きで、よく車の中で『風立ちぬ』を熱唱していました」

いつの日も、いつの時代も、遠く過ぎ去った時代は懐かしく、去りゆく人は優しい思い出を残しています。そして描かれた人生の軌跡は、今終局を迎えました。京太郎は、命の限り生きて、最期の時を迎えました。人は誰しも、胸の中に心のアルバムを持っています。その心のアルバムには、大切な思い出だけではなく、大切な気持ちまでもが詰まっています。涙と笑いに溢れた豊かな人生でした。

「講演会で熱弁を振るうこともありました。医師としてのあり方、考え方、その生き方は、多くの人々に感銘を与えました」

使命を果たそうとした生き様。

京太郎は、私たちを導く魂となり、いつまでも精彩を放ち続けることでしょう。

鈴木京太郎 八十歳

二〇一一年（平成二十三年）六月二十五日

永眠